

モイドン再考—祖霊祭祀論を越えて

林 洋平

目 次

はじめに

第一章 モイドン研究の問題点

第一節 ウッガンとモイドン

第二節 モイドン解釈の拡大

第三節 森神としてのモイドンへ

第二章 モイドンと他の森神信仰の研究

第一節 ガロー山とモイドン

第二節 祖霊祭祀論の隆盛

第三節 多様性への注目

おわりに

はじめに

モリという字は森のほかに杜とも書かれる。神社の杜などがそれにあたるが、ただ森と書くよりも厳かな、特別な意味を持ったモリであると感じられるであろう。実際に、神社の杜は都会の真ん中にあっても、中に入ってしまうえば、誰でも、なにか清浄な、都会の喧騒が遠く感覚を覚えるであろう。このような神聖なモリというのは神社だけではなく、沖縄県のウタキから山

形県など東北のモリノヤマに至るまで日本各地に見られる。これらのモリが神社と異なるところは、大きな社殿を持つことが少なく、森自体や、森の中に祭場が設けられるか特定の神木があって祀られていることである。それらは、「森神」と総称され、各地域の人々の信仰対象として早くから取り上げられてきた。

本論考は、森神信仰研究の一分野である薩摩・大隅両半島に分布するモイドンの研究史をたどることで、その研究史上の問題点を明らかにし、それが森神信仰の全体にかかわることを述べ今後の研究の足がかりとするものである。

第一章では、まず小野重朗によるモイドンの研究をなぞりながら、小野の祖霊祭祀を焦点とした研究と、モイドンの性格を祖霊以外に求める下野敏見の対立を確認し、モリが祖霊の祭場か否かを語るために、モイドンという対象が恣意的に作られていったことを論じる。

第二章では、モイドンと他の森神信仰の比較を通して、第一章で示した問題が森神信仰全体に対してもいえることを述べる。また、この問題に対する形で著された徳丸亞木の成果について言及し、森神信仰の研究がどのように変化し、どの問題が解決し、何が課題として残ったのかを論じる。

第一章 モイドン研究の問題点

第一節 ウッガンとモイドン

モイドンは、小野重朗らの指導する鹿児島県立指宿高等学校郷土研究部による指宿地方のウッガン（内神）⁽¹⁾の調査⁽²⁾において、ウッガンの特殊な一形態として初めて論及された⁽³⁾。

モイドンとは、小野の言葉を借りると、「森に殿という敬称をつけたので森神の意味である。薩摩、大隅両半島に多い神で、大隅ではモイヤマ（森山）とよぶことが多い⁽⁴⁾」とされる。さらに詳しく述べると、モイドンはモイヤマなどと呼ばれる聖なる森の中に配され、その中の一本の樹に注連縄を張ったり、根元に幣を挿したりして祀る例が多い。森の中に自然石が積まれ

ているだけというものも存在する。小祠を伴いその中に自然石や幣を納めているものもあるが、その数は少ない。また、森とは呼べないような一本の樹や、小祠だけになってしまったものも存在するが、それらはみな、元は深い藪を形成していたなどと説明される。モイドンは、森の中の目印となるような樹を祀っているのが主な形といえよう。

モイドンのドンは敬称の「殿」である。西郷ドンのドンであり、建物の意味ではない。また、モイドンにはモイガン（森神）やモイガンドンなどと「神」を付けて呼ぶ例が見られない。これは、内神をウッガンやウッガンドンとも呼んでいることと対比される。ウッガンとの違いでいうと、モイドンが樹木を中心とし、小祠を伴うものが小数しか見られなかったのに対し、ウッガンは、樹木を神体とするものが一例も無く、そのほとんどが小祠を持ち中に自然石や幣などを祀る形となっていることも注目されている。モイドンとウッガンで共通する点は、その祭祀集団にある。両者共に藩政時代の同族的組織であるカド（門）を単位として祭られ、本家であるオツナケ（乙名家）が祭祀の中心となる。祭りの日は旧暦の霜月が多いが、一・五・九月などにも行なわれ、彼岸にはオツヤとって神前で夜を明かしたという。モイドンの場合はこの祭りを特に、モイコ（森講）と呼ぶことが多い⁽⁵⁾。

小野の初期の段階におけるもっとも重要な結論は、モイドンからウッガンへの段階的变化を述べたものであろう⁽⁶⁾。当初、モイドンの本体を祖霊と同等していた小野は、モイヤマが墓に付随するもので、祖霊を祀る祭場であったと考えた。原初形態のモイドンは墓のそばにあり、人々はそこで祖霊を祀っていたが、神社的な抽象的な神の祀り方が浸透するにつれて、祖霊は小祠に祀られ、利便の面などから屋敷地内に移動させられてゆくことになった。その際、屋敷地内に祀られるようになったことから内神と称するようになったとする。

モイドンとウッガンを分けるもう一つの性格に、祟り伝承がある。両者は同じように同族的組織であるカドの守り神とされるが、モイドンは非常に祟りやすいとされ、逆にウッガンはほとんど祟りを顕すことはない。この違いについて、小野は、同じ祖霊を祀ったものでもモイドンは墓地に埋めた先祖

をその場で祀るため死霊に対するおそれから解放されていないとされ、ウツガンについては、先祖は祖霊として抽象化されてしまっているため祟るという性質は捨て去られていると考えている⁽⁷⁾。

これらの、小野による初期の分析には、モイドンがウツガンの調査時に見い出されたという経緯もあり、論の中に両者の混同が見られる。混同というよりも、モイドンをウツガンの一形態として捉えていると言ってもよい。そして論旨の根幹には、後に下野敏見らによって否定され、小野自身も撤回した祖霊祭祀という先入観が重要な位置を占めていたのである。

第二節 モイドン解釈の拡大

研究の初期の段階において、モイドンとはモイヤマ全体を指すというよりは、モイヤマの中に祀られている木々や小祠などを指して言われた。モイヤマの中の数本の樹自体を、もしくはそれを目印としてその場に供えものをし、祀られるのであるが、小野は、祠などは後に発生した形であると強調し、供養築きの塚木である例なども示しつつ、モイドンはこの樹木に対する信仰であるとしていた。

また小野は、モイドンの祟る性格に大きく注目をした。ただしウツガン調査の時点では、まだモイドンの祟るという性格はほとんど注意されておらず、一九五五年の「指宿地方の内神一覧」⁽⁸⁾にも、モイドンの祟りに関する記述は、十石集落福永門のモイドンの「やかましい神である」と、道下上集落下曾山門のモイコジンが「イナカヒト（たたる神）と言われる」の二件のみである。その翌年の「モイドン一覧表」⁽⁹⁾にも、祟りに関しては特別項目をとって記載されているわけではない。小野はその後、徐々に祟りに注目していったのであろう。

それはおそらく、ウツガンにはその性格がほとんど見られないことに対する対比としてである。ウツガンとモイドンは両者とも、カドの守り神、そして子どもを好く神だという例も多くある。しかし、常にカドの人間を守ってくれるウツガンと異なり、モイドンは、そのモイヤマの枝を持ち帰ったり、不用意に侵入したりすると、子どもでさえその祟りの対象となることがあ

る。モイドンの崇る性格を、ウツガンとは異なる対象として分別するための大きな特徴と捉えてのことだったのであろう。

ここにきて、モイドンは、祖霊や先祖を祀る地であるという認識を残しながらもウツガンとは区別され、樹木や聖地に対する信仰であるということが強調される。しかし、この崇るモリ＝モイドンという認識が元で、その後のモイドン研究は非常に重要な点をあいまいにしたままに進み、混沌としてゆくことになる。それは、モイドンがモイヤマの中の特定の樹木や小祠に祀られたものを指すのか、モイヤマ全体を指すのかという点である。祀っている人々の中でもそれらがあいまいになっていることも多いが、森が消え、一本の樹だけが残ったモイドンの存在などにも後押しされる形で、小野の中では、モイヤマ全体をモイドンの聖地とみなしてゆく方向に変化していった⁽¹⁰⁾。例えば、大隅半島におけるモイヤマに対し、「大隅ではモイヤマと呼ぶことが多い」とだけ述べ、これをモイドンとして扱ってゆく。

これはなにも名称のことを言いたいのではない。小野自身がその混乱の中にいることを示す例として、次のようなものがある。

上境には在の七つの門以外に浦の漁業の人々がいて、その中に森山姓が三戸ほどあり、その三戸でまつる神はウチガミとってモイヤマドンと言わぬがやはり大木と小さい祠を持っているのはその姓から考えてもモイヤマだったかと思われる。⁽¹¹⁾

小野は、明らかに薩摩の調査の段階であればウツガンとしていたであろうこの事例をもモイドンに含めている。

小野は対象を恣意的に分別することによってモイドンの範囲をモイヤマにまで広げた。そして、小野の設定したモイドンは、後の研究の大枠として無批判に利用され、他の森神信仰との線引きをまた、複雑にしてゆくのである。

第三節 森神としてのモイドンへ

小野は祖霊祭祀を出発点としてモイドンを考えていた。そのため小野は、

「モイドン概説」において、モイドンが墓地近くにある、またモイヤマの中に墓地を含む例が多いことを示すと同時に、門屋敷とモイドン、ウツガン、墓地の位置関係を詳細に検討することにより、墓地、モイドン、門屋敷が、この順番で並んでいることが多いとした⁽¹²⁾。しかし、これも必ずしもそうとは限らないことが郡山重遠によって報告されている⁽¹³⁾。それに加えて、モイヤマの中に、多く石塔・五輪塔や板碑、墓石の残骸が見られることから、小野はモイドンを両墓制の詣り墓に相当すると結論づけた。その後、小野は両墓制という言葉の使用は控えるが、この際にできたモイドン＝祖霊祭祀というイメージは、前述のモイドンからウツガンへの段階的変化という考察を支えてゆく。

その後の研究史では、直江廣治の屋敷神の研究に見られるように、同族集団の祭祀対象である屋敷神の一部としてモイドンや森をとらえ、祖霊との関わりを論じる視点からの研究が主流となった⁽¹⁴⁾。その結果、モイドンや森神のもつ様々な性格は祖霊のもたらす恩恵や、畏れへと還元されてゆくことになる。

これに対して下野敏見は、「モイドンのすべてが埋葬地に近いわけでは無く、むしろ埋葬地に遠い例が多い」、「モイドンに供養墓塔や五輪塔片などがあることは祖霊と結びつけやすいけれども、それが有縁の人の場合、(中略)特定の人物であることが多い⁽¹⁵⁾」と述べ、小野の祖霊説を否定した。それと同時に、モイドンは本来、開拓時に開拓地に満ちていた怨霊や地霊、開拓時に伐採された樹霊、その他の森や山野に満ちている精霊達などの諸霊を一カ所に寄せ祀ったものであると結論づけた。

下野のこの見解は、本人が南西諸島におけるフィールドワークによって得た実感に依拠してはいるが、祖霊信仰論が盛んであった当時の民俗学会内の論調に異を唱えるものであり、画期的であった。この視点は、祭祀の主体であるカドの、内部の霊を祀るという考えから、外部の神を祀るという視点への変化である。

モイドンを、自然としての森を対象とする信仰ととらえ直すことで、森神信仰に対する視点は大きく変換した。これによって、かえって祖霊信仰が森

神信仰の一部として配置し直されることになった。このような姿勢は野本寛一などによって、森と人との関係の多様性として論じられてゆくことになる⁽¹⁶⁾。小野自身にも徐々にその論調に変化が見られ、論文としてはまとめられていないが、一九八〇年代後半に小野の元を訪ねた岡谷公二に、「現在は、モイドンは祖霊や死霊を祀ったものではなく、もっと古い、縄文的な、山や森に対する直接の恐怖から生れた聖地だと考えている⁽¹⁷⁾」と述べている。

話をむし返すようであるが、これはモイドンとウッガンが完全に別物であったかという議論とは別問題である。モイドンとウッガンには祭祀集団の単位や祭日の一致、森の中にウッガンだけが祀られている例などがあり、近似した役割をもっていたことを否定できない。しかしまた注意しなければならないのが、モイヤマの中にモイドンとウッガンが両方祀られている例もあるという点である。これに対して下野は、モイドンとウッガンが同じ機能の神なのであれば両者の併存はあり得ないと述べている⁽¹⁸⁾。確かに、同時に存在するという事は、その地域では両者が別物として扱われていると云ってよいであろう。

しかしながら、筆者は上記のようなウッガンがモイドンの変形かどうかとの視点に立つよりも、モリを祀る信仰の一形態として、その性格を多角的に論ずべきだと考える。モイヤマの中には、モイドンのほかに多くの神が祀られており、墓石の残骸だけではなくウッガンや稲荷神などが祀られることも多い。例えば、指宿市東方道上集落にある上西園のモイドンは、

門の位置に接して二畝ほどのモイヤマがあり、そこにモイドンだけでなく内神（方二間のワラブキ木宮）、稲荷（自然石）、山ノ神（モガシの木）も祀ってある。これらはモイドンの位置に後に他の場所から移したものである。モイドンは森山中で最大のアコウの直径二メートルほどの木を神体とし、祭の日に幣を立て、花筒もある。祭はこれら四つを一緒に旧十一月三日に、宿を巡回にして、赤飯、シトギ供えて祭り宴をはる。これをモイコ（森講）というからモイドン中心であることがわかる。⁽¹⁹⁾

このうち、ウッガンと山の神については、他の場所にあったものを、モイヤマの中に移したことがはっきりとしている。さらに小野はこれに続いて、

内神は上西園門の家々を守る神で、モイドンは門全体の土地や人やその他の総合的な神と聞えているように見える。

と述べる。小野は、モリというのが場所の名であり神の名でないことに注意すべきとし、聖地に神を迎える祭事がモイドン信仰であるとする。モイヤマは神々を祭る聖地であり、モイドンはモイヤマの中心をなす祭祀対象を指している。モイヤマがカド単位の聖地で祭場であれば、そこでカドの祭りが行なわれることは当然であり、ウッガンの祭りがそこでなされることも少しもおかしくはない。モイドンとウッガンの両方が同時に祀られてもよいのである。その際、モイドンの祭場という性格が忘れられれば（小野の調査時にもすでに多くのモイドンがその意味を忘れられていた）、カドの祭りとしてもっとも一般的なウッガン祭りと同様な祀り方に変化してゆくこともあるであろう。

モイドンは、モイヤマという聖地を象徴するものである。それが直接神の名を指すのかそうでないかという点は、微妙な感覚を伴うところであり、神だと思っている人もあれば、あくまでそうではないと考える人もいるであろう。ウッガンと同列において比較するのではなく、本来ならば、このようなモリの持つ役割を考える視点に立つことで、初めてモイドンを他の森神信仰と並べて考えることができる。

ここからしばらく、他の森神信仰の研究との比較を通して問題点を浮き彫りにしてゆきたい。

第二章 モイドンと他の森神信仰の研究

前章では、いささか、先学の残してきた研究の成果をないがしろにするようなことを書いたが、森神信仰の研究史において、森神信仰の持つ多様な性

格が論じられてこなかったと述べるつもりなのではない。同族神、祖霊信仰という側面を重視するあまり、他の側面を軽視する傾向があったと言いたいのである。そうなってしまった背景には、実際には先行するもう一つの大きな問題がある。

第一節 ガロー山とモイドン

まず、種子島に多く見られるガロー山を取り上げて論じる。ガロー山については小野も調査を行なっているが、下野の調査が詳しく、種子島に分布する一五〇ヶ所以上の事例を紹介している。

ガロー山は、本家筋の家の近くにある森で、その中の一本の木を神木として拝む。同族で祀り、田を開いた時に祀ったという伝承を持つものが多い。ガロー山の神木の根元には泉や井戸を伴い水源林をなしている場合がある。ガロー山の木の枝を折ったり、不敬を行なうと祟り、祟りへの対処には、海の潮井が効果的であるとされる。ガローという名称は伽藍を表わし、宗教者によってもたらされた伽藍神を祭ったものともされるが、種子島では、寺院の伽藍ではなく民家を守る屋敷神となっている⁽²⁰⁾。

小野は『種子島民俗』一六号の中で、ガロー山とモイドンの性質を以下のように区別している。

①天草、長島の山祭り・種子島のガロー《泉と山の信仰系列》

②薩摩、大隅のモイドン・沖縄のウタキ（モリ）《祖霊精霊の信仰系列》⁽²¹⁾

この分類は、鹿児島にもガロー山があり、種子島にもモイドンがあるとし、同一のもの、同一の性格のものを同じ土地で別の名で呼ぶとは考えられないという理由から、モイドンとガロー山は本来異なる性質を備えたものだとして区別したものである。

しかしながらガロー山とモイドンを名称の違いだけで別物だと区別するのは無理があろう。実際に、小野の調査でも、日置郡伊集院町入佐では、モイヤマに対してモイヤマドンともガランデンドンとも呼ぶ事例があるが、そのことについては、存在が指摘されるにとどまっている⁽²²⁾。

種子島のモリがモイドンかどうかの当否は別として、鹿児島に見られるガ

ロー山（ガラン山やガランドンと呼ばれる）の中には、石の祠や五輪塔が存在する場合がある。下野の挙げた種子島のガロー山の特徴よりもむしろ、モイドンに近い形態である。鹿児島では周辺地域でモイドンが多く祀られており、それらの影響を受けることも考えられ、モイドンとガロー山を明確に区別することは難しい。

これに対して、種子島の民俗神を詳細に調査した下野によると、大きな特徴として、ガローには必ずといってよいほど、泉が付属していること、種子島での崇り神がガローだけであることが挙げられる。また、下野はガロー山の性格にまつわって最もよく聞かれる話として「開拓時の藪や森や湿地にいたもろもろの悪霊、精霊を祀った神」であり、「人間生活に災いを与える悪神の類を一カ所に集めて祀った」⁽²³⁾とする伝承を挙げる。これは、前述の下野のモイドンに対する結論と同じものであることが分かる。下野はモイドンとガロー山をよく似た、同じ系統の森山信仰であるとし、後代の変化がモイドンの方が活発であったため現状に差ができたと考えている。⁽²⁴⁾

以上のように、名称で対象を分類することは、大きな問題をはらんでいる。そのため、小野が薩摩のモイドンと大隅のモイヤマを同じものとして、総称してモイドンと呼んだように、対象の範囲を特定するためには恣意的な操作が必要となる。にもかかわらず、後の研究者には、「モイドン」や「ガロー山」という名称で同定できる確固とした対象があるように錯覚され、それらは地域的な類似の信仰の中でも個別の性格を持つかのように語られてゆき、「モイドン」は他の森神信仰と区別され、その類似点や相違点が論じられてゆくことになる。

この問題は、モイドンとガロー山の二つだけを取り上げて同じ系統の信仰とした下野にもいえる。モイドンもガロー山も性格は多様であり、一つの性格のみで異同を語れるものではない。各モイドンや、他の森神信仰の対象も、宗教者などの介在や、地域間の交流などを経て、互いに影響し混ざり合い、混同されつつ区別されつつ今に至っているよう、それらを解きほぐすことは重要であるが、性格の強弱をもって、モイドンとはこのようなものである、ガロー山とは同一である、いや別物であると論じても、強調する性格を

変えてしまえば結論も変わってしまう。森に関する信仰という同一性の元で取り上げられているのであるから、その類似や差異とされる各個の性格の多様性のほうが強調されるべきである。

下野はガロー山の性格について、

河童の神、水神、防風林、水源地、家老の神、廃仏毀釈の時に経文仏具を埋めたところ、田の神、山の神、開拓神、開田時に田にいた他の神や木の神やいろんな悪い神を祀った所など。なかには、さあ何の神だろうか、と首をかしげる老人もいる。⁽²⁵⁾

と羅列的に述べてはいる。しかし、そのなかでもっともよく聞く、開拓時の諸霊との伝承をガロー山の特徴として、他は付屬的な性格としてしまう。何の神かも分からずに祀っている人に関しては、分からないのにもかかわらず、なぜそれでもなお祀るのかという経緯を明らかにするよりも、忘れられた神が何であったのかを明らかにすることが優先されてしまっているのである。

ここでも第一章で述べたように、明らかにすべき祖霊信仰との関わりや、それへの反論を述べるための、「祖霊祭祀の森としてのモイドン、そうではない森としてのモイドン」という、対象とする森の現状に優先して、目的の先行が見られるのではないだろうか。

第二節 祖霊祭祀論の隆盛

森神信仰の研究の中でも、若狭のニソの杜は最も広く知られているといわれてよいであろう。概要を簡単にまとめると、若狭の大飯町大島半島にはニソの杜と呼ばれるモリが約三〇ヶ所あり、村の開祖二四宗家の先祖を祀ったとされている。モリには二〜一〇本程度の大木が茂り、小祠が置かれ、その中には「地主大神」「遠祖大神」などと書かれた神札が納められている。モリそのものが信仰対象とされているので、森の立ち木を伐ることは戒められ、下草などはしっかりと手入れされる。祭日は霜月二二日、二三日となってお

り、そこから、ニソ（二三）の杜という名称がつけられたとされる。

柳田國男は「塚と森の話」（一九一二）を著し、大正年間に、すでにモリについても関心を示していた⁽²⁶⁾。このニソの杜について、若狭の三方郡などのダイジョウゴン、ダイジゴンなどとの関連において、安間清にあてた書簡の中で、

大いなる意義はニソウ即ち十一月二十三日を以って先祖の祭をすることにて小生などは全く是あるが為にくらも残らぬ老後の時間を費やすに足るとまで致し居候⁽²⁷⁾

とまで述べている。

ニソの杜の祭祀は新嘗の祭りであり、同族による祖霊祭祀がその中心にあるという見解は、柳田以降の流れであるといえる。けれども、後のニソの杜研究において、福田アジオの、若狭大島においては同族関係よりも親方子方関係の方が強いという論から、ニソの杜の祭祀が同族を単位としているかどうか疑わしいとされるなど⁽²⁸⁾、現在では同族による祖霊祭祀という考え方は見直されている。

また、早くから森神に注目した研究として、ニソの杜についても言及した直江は島根県西石見の荒神森、藪神、森神をまとめて論じている。これらには、分家を出す時や転居をする時に、潰れた家を買ってそこに住む場合があるが、そのとき森神や墓もまた引継ぎ、新転入者が祀ってゆく例が見られる。土地に付き、個々の家に付属した神であるため、同族で祀るという形は認められない。

しかしながら、このような事例報告をしているにもかかわらず、これら地主神と荒神に対する結論としては、

この2つの信仰は、内容においてきわめて多くの一致点を持っていること、すでに指摘してきたごとくであり、本質的には1つの源に発したものと見るのが妥当であろう。私はその源を祖霊信仰と考えている。荒

神の方は、荒々しく崇るといふ祖霊の性格の一面を表現した呼称であり、それに対して地主の方は、祖霊の土地神的な性格を表現した呼称ではあるまいか。⁽²⁹⁾

とする。そして、モイドンやニソの杜、山口県のモリ様などが、同じ祖霊の祭場として比較されるべきとして、「屋敷神の祭場」などの論を展開している。

直江は同族祭祀としての屋敷神の研究に重きを置いた。その背後には、柳田の祖霊観が流れているが、柳田の論を具体的に証明する事例としても、この森神信仰の比較研究は後に大きな影響を与えた。まず屋敷神を「狭義の屋敷神」「広義の屋敷神」の二つに分け、「狭義の屋敷神」を、屋敷神と聞いて我々がすぐに連想するような、宅地内の一角に小祠を構えて祀られている神のこととする。また、屋敷の裏山や、やや離れた持ち山の山林、田畑など家の生産場のほとりに祀られているようなものの中にも、「狭義の屋敷神」と祭祀内容を同じくするものが多々あるとし、それらを合せて「広義の屋敷神」とした。

次に、屋敷神をその祭祀者の範囲という観点から、「各戸屋敷神（部落内のほとんど各戸ごとに屋敷神が祀られている形態）」「本家屋敷神（部落でも特定の旧家・本家筋の家に限って屋敷神が祀られている形態）」「一門屋敷神（本家に属する屋敷神を、同族が一団となって祀る形態）」に分類した。そして、モイドンからウッガンへ変遷したという小野の論などを基に、「一門屋敷神」から「本家屋敷神」へ、そして「各戸屋敷神」へ変化していったという流れを考え、また、「広義の屋敷神」で見られる形態のほうが、「狭義の屋敷神」に先行するとした。

ここで問題となるのが直江の問題意識である。直江は屋敷神の原初形態並びに原初の信仰について考察することを目的としている。そのため、結論は「屋敷神の祭場の原初形態を追求してゆくと祖霊の祭場としてのモリの信仰に結びついてくる」とする。ここでもまた、森を祀る事例の中で祖霊信仰だけでは説明できないものの多くを「右の諸例には、後々の変化と思われる

ものも多く織り込まれているが、まず薩南のモイドンと同質の信仰と認めてよいであろう」と片づけてしまう姿勢が見られるのである⁽³⁰⁾。

森神信仰に対するこのような一元的な扱い方に対しては、近年になってようやく、徳丸亞木などによって、過去の反省をふまえた研究が進められるようになった。

第三節 多様性への注目

二〇〇二年に上梓された徳丸の『「森神信仰」の歴史民俗学的研究』⁽³¹⁾は、森神信仰の多様性を見事に描いている。徳丸は、まず対象地域を山口県に絞ることで、論点を森神信仰の地域的展開とし、地域の実状に即した具体的な記述を目指した。次に、藩政期の史料を基に、「森」に祀られていると記述されているものを拾い上げ、整理することで、この時期、寺社方では「森」を祭場とする神が、「森神」と総称されていたことを明らかにした。また、各森の名称の種類を数値にして比較し、森神が農耕神としての性格が強く、必ずしも祖霊祭祀の対象ではないことを示した。つづいて、現代の山口県下のモリサマ、モイサンの形態を分類した「モリサマ」の祭場形態類型概念図⁽³²⁾を作成する。そしてこれに藩政期の事例を当てはめる形で整理した。

現代の森神信仰に関して、徳丸が何をもって森神としているのかが多少分かりにくいのが、森神をめぐる祭礼である「森祭り」が行なわれていることなどを指標に、名称にとらわれず、信仰の対象となっている森が広く取り上げられている。そして、それを祀る地域の生業などの現状に即してどのような祀られ方がされているのかが、民俗誌的叙述により具体的かつ詳細に記述されている。また、現代に生活する人々の保持している伝承に注目し、それらが、確かに土地の人の生活に影響を及ぼすような生きた伝承であることを述べ、「心意」の解明を目的として研究されるべきであるとする。森神に関する様々な基層的信仰観念が示され、それらの複合的なあり方が論じられている。

これを先のモイドン研究と比較してみると、土地の人々の生活や伝承に重きを置いたという点がもっとも大きな相違であろう。「祖先を祀ってはいる

が、開拓先祖か祖先のすべてを祀っているのかはわからない」といった人々の実際の認識をも捨て去ることなく捉えている。また、森神信仰の多様なあり方自体を忠実に報告することで、祖霊祭祀以外の側面を具体的に描き出している。徳丸のような記述をすることで、森神信仰の多面的な性格を示すことができる。これによって森神信仰研究の第一の問題であった、始原を求めようとするあまり対象の捉え方が一元的になってしまうという点はある程度回避することができよう。

ではもう一つの問題であった、モイヤマ（モリ）の範囲があいまいであるという点はどうであろうか。

小野や直江は自らの論旨に適合したモリを選んで森神信仰の対象範囲として定めた。ところが、徳丸の記述方法は「森神にはこういった性格を持つものがある」という形式になっているため、「これが森神である」という確固とした対象を示すことができない。徳丸は山口県下のモリサンを網羅的にその形態で分類することはしたが、例えばモイドンのモイヤマに祀られているウッガンや稲荷神、地神や荒神のことを考えると、それらからくるモリの性格を森神として論じてよいのか、それとも森神のモリをただの祭場とみなすべきなのかの判断が難しい。さらにはモリとその特質上微妙な位置関係にあるダケなどをどう区別してゆくのか。神社や仏閣に付随する社叢とはどこで線を引くのか、または引かないのかなど様々な点で課題を残している。

おわりに

小野のモイドン研究には、その対象範囲の設定が恣意的であったこと、そして、モイドンの始原を一元的に語ろうとするという問題点があった。その背後には当時の学会内で強力であった祖霊信仰論の隆盛があり、それを証明するものとしてのモイドンという捉え方が二つの問題を生んだ。そしてこの問題は後のモイドン研究、他の森神信仰の研究でも踏襲され小野のイメージとしてのモイドンが実態として存在するかのように取り扱われていった。

これらの危険性を指摘した徳丸は、森神信仰の始原形態の追求のみではな

く、その多様な側面を重視することで、森神が祖霊祭祀の祭場であったか否かの一元的議論に一応の終止符を打ったとってよいであろう。しかし、祖霊祭祀の是非を論じるための資料という性格を失った「森神」は、再びその性質があいまいとなってしまった。

森神信仰の研究対象があいまいなのは、木が何本からを林といい何本からを森といえよいか明瞭ではないように、はっきりとした線引きをすることが難しいからであろう。ならば、それらを包括できるような属性で述べる必要がある。ちなみに徳丸は『日本民俗大辞典』の「森神」の項で、森神を「聖地としての森をまつり場として、あるいは樹木を依代としてまつられる神」としている。今後、森神信仰として何を扱ってゆくべきなのか、地域ごとの多様性の比較のためにも、現代の実情に即して、研究者間の共通理解をもっておく必要を感じる。

註

- (1) ウッガンとは、鹿児島県及び宮崎県の一部で見られる屋敷神で、石や藁苞（わらづと）を神体とする。主にカド（門）と呼ばれる同族的組織か、オツナケ（乙名家）と呼ばれるカドの本家で祀られる。
- (2) 指宿高校郷土研究部「指宿地方の内神の研究と調査」『薩南民俗』七号 鹿児島県立指宿高等学校郷土研究部 一九五五年。
- (3) 小野重朗「指宿地方の内神祭概説（指宿地方の内神の研究と調査）」『薩南民俗』七号 鹿児島県立指宿高等学校郷土研究部 一九五五年（一） 五三頁。
- (4) 小野重朗他『指宿市誌』市史編さん室 一九八五年 一一七九～一一八〇頁。
- (5) 小野重朗「モイドン概説」『薩南民俗』一〇号 鹿児島県立指宿高等学校郷土研究部 一九五七年（一） 一二～二四頁。
- (6) 註（5）小野重朗前掲書 一八～二一頁。
- (7) 註（5）小野重朗前掲書 二四～二六頁。
- (8) 註（2）指宿高校郷土研究部前掲書。
- (9) 指宿高校郷土研究部「指宿地方のモイドンの調査」『薩南民俗』八号 鹿児島県立指宿高等学校郷土研究部 一九五六年。
- (10) 小野重朗「ガローとモリとの二元性」『種子島民俗』一六号 一九六三年 九頁。「古くか

らモリと言った場合はモイドンのことで、現在のようにこんもりした木立でさえあればみな森というような使い方は昔はなかった。土地の人たちが古くからモリとよび習わしている所は必ずモイドンだが、木立があつて盛りになつていてもそれはモイドンではない」と述べており、モイヤマ全体を指してモイドンとしていることがうかがえる。

- (11) 小野重朗「大隈のモイドン」『民俗研究』三号 一九六六年（一） 三六頁。小野は自身のモイドン調査による一応の結論として、祭祀者が森姓の間人であるモリに対し「人の姓に森がつくときは、そのモリはモイドンのことで、木立という新しい意味の森ではない。」（註（10）小野重朗前掲書 九頁）と述べ、これを祀り手にモイドンと直接呼ばれない森にも適用している。
- (12) 註（5）小野重朗前掲書 一五～一八頁。
- (13) 郡山重遠「薩摩半島南東部におけるモイドン（森殿）信仰の地理学的研究」『鹿児島地理学会紀要』二二巻二号 一九七六年。
- (14) 直江廣治「屋敷神の祭場」『日本民俗学会報』三九号 一九六五年。
- (15) 下野敏見「森山信仰の研究—モイドンとガローヤマの成立」『鹿児島大学人文学科論集』一九号 一九八四年 一二四頁。
- (16) 野本寛一「巨樹と神の森」『共生のフォークロア 民俗の環境思想』青土社 一九九四年、野本寛一他著（財）静岡県文化財団、静岡県環境民俗研究会共編『山と森のフォークロア』羽衣出版 一九九六年等。野本らは、実利的な面など、人間と森の多様なかかわりを提示する。
- (17) 岡谷公二「神の森 森の神」東京書籍 一九八七年 八八～八九頁
- (18) 註（15）下野敏見前掲書 一二一頁。
- (19) 小野重朗「南九州の民俗神（九） モイドン（森殿）」『民間伝承』三二巻二号 一九六八年 一〇五～一〇六頁。
- (20) 国分直一「種子島のガローその事例と性格」『豊中民俗』二巻四号 一九五八年、下野敏見「種子島の村落構成—クミカワ・ガロー山・石塔」『日本民俗学会報』一九号 一九六一年、下野敏見「種子島の聖地信仰ガロー山」『南日本文化（種子島総合学術調査報告書）』二号 一九六九年（下野敏見「ガロー山をめぐる諸問題」谷川健一編『日本民俗文化資料集成二一巻』三一書房 一九九五年所収も参照のこと）。
- (21) 註（10）小野重朗前掲書 一一頁。
- (22) 小野重朗「森山とガラン山との報告」『種子島民俗』一七号 一九六五年 一九～二〇頁。「門の内神のところから乙名が、台地から下に見える森山に向かって供えもののシトギを投げながら「ガランデンドンにあげ申す、森山ドンにあげ申す」と言っていた。
- (23) 註（20）下野敏見前掲書一九九五年 四八四頁。

- (24) 註 (15) 下野敏見前掲書 一三六～一三七頁。
- (25) 註 (20) 下野敏見前掲書一九九五年 四八四頁。
- (26) 柳田国男「塚と森の話」『定本柳田国男集一二巻』筑摩書房 一九一二年。
- (27) 安間清編著『柳田国男の手紙 ニソの杜民俗誌』大和書房 一九八〇年 三六～三七頁。昭和二五年三月五日の書簡。
- (28) 福田アジオ「若狭大島の村構成と親方子方制度」和歌森太郎編『若狭の民俗』吉川弘文館 一九六六年。
- (29) 直江廣治「森神信仰」和歌森太郎編『西石見の民俗』吉川弘文館 一九六二年 二一六頁。
- (30) 註 (14) 直江廣治前掲書。
- (31) 徳丸亞木『「森神信仰」の歴史民俗学的研究』東京堂出版 二〇〇二年。
- (32) 註 (31) 徳丸亞木前掲書 六一頁。